

## 報告

## 藤女子大学と厚田中学校との学習支援連携

～実施初年度の現状、課題そして将来的展望～

伊井義人（藤女子大学）

山村健史（石狩市立厚田中学校）

反保遥、鈴木遥、浦川智帆、平鍋舞、岩崎遥、西川絵梨（藤女子大学学生）

## はじめに

平成 23 年 1 月より、石狩市立厚田中学校と藤女子大学との間でスクール・アシスタント・ティーチャー制度（以下、厚田 SAT と略）の実施が模索されて、一年が過ぎようとしている。その間、授業内外での生徒への学習支援だけではなく、部活動内での交流、学校行事の訪問など、藤女子大学の学生・教員は厚田中学校と多様な関わり方をもってきた。つまり、厚田 SAT は狭義の「学力」向上のみを目的とした学習支援ではなく、「学力」を幅広く捉え、活動を行ってきたのである。SAT 事業は、約 10 年前から石狩市教育委員会（具体的には、小・中学校）と藤女子大学が連携し継続してきた。今回報告する厚田 SAT は、その流れを継承しながらも、独自の特性をもつ学習支援事業として、実施されてきた。実施初年度が終わる今、この一年を振り返りつつ、来年度以降も本事業を継続することを目的として、本稿を作成することとした。そのためにも、一人でも多くの参加者の意見を形に残したいという意図から、本稿には、大学側や中学校側の教員だけではなく、藤女子大学の学生（人間生活学部・文学部）にも執筆者として関わってもらった。

本報告の具体的な目的は、今年度から新たに開始された厚田中学校と藤女子大学間の SAT 事業の現状、課題および将来的展望を明らかにすることにある。この目的は、いわば厚田中学校と藤女子大学の組織内の指針といえる。しかし一方で、対外的にも、本稿の内容は、第一に大学生による学習支援を実施している、もしくは、しようとしている大学への示唆を提示できる。大学生による小中学校への学習支援は、現在、珍しいことではない。北海道内でも、札幌市、恵庭市などでも実績は蓄積されつつある。しかし、それらの報告は、一般的には公表されず、客観的に学習支援の動向を把握するための蓄積は十分とはいえない。第二に、今回の SAT 事業の連携先が厚田中学校という「へき地三級」の学校という特殊性である。都市部における学習支援活動はよく聞かれるが、へき地への支援は、北海道教育大学釧路校の事例など、非常に少ない。第三に、厚田中学校はへき地三級でありながら、石狩市内からは車で 45 分程度、札幌市内からも場所によるが 1 時間程度で着いてしまう「都市型へき地」との特殊性である。以上の三点からも、今後、大学生による学習支援を検討している各種教育機関にも示唆を提示することができると確信している。（伊井義人）

## 1. 厚田区とは

厚田は、南北に細長い石狩市の中央部に位置している。面積は約 292.84 km<sup>2</sup>と広く、これは恵庭市とほぼ同じ面積である<sup>1</sup>。東は当別町、北は旧浜益村（現石狩市浜益区）と隣接している。西は日本海に面し

<sup>1</sup> JA 北石狩ホームページ [http://www.ja-kitaishikari.or.jp/05\\_access/atsuta.html](http://www.ja-kitaishikari.or.jp/05_access/atsuta.html)（2012 年 2 月 10 日アクセス確認）

ているため厚田漁港があり、日本の重要湾港の石狩湾新港も近い。

元々は江戸時代よりニシン、アキアジ（秋鰯）漁の季節的出稼ぎ漁場としての地域であった。明治になると各県から続々と集団移住が始まり、役場が設置され今の厚田の前身ができた。明治 35 年には二級町村制が施行され、聚富（しっぷ）、望来（もうらい）、嶺泊（みねどまり）三村を合わせて望来（もうらい）村とし、古潭（こたん）以北の七村を合わせて「厚田村」が誕生した。さらに明治 40 年には一級町村制が施行され、厚田、望来を合わせて「厚田村」となった。平成 17 年には浜益村と共に、石狩市に編入合併し、「石狩市厚田区」となった。

なお、平成 23 年 12 月の時点で厚田区の人口は 2,320 人で、1,193 世帯となっている<sup>2</sup>。鯊漁の衰退に連れて人口は年々減少しているため、学校を統合する動きも進められている。小学校は厚田小学校、望来小学校の 2 校、中学校は厚田中学校の 1 校、小中併置校が聚富小中学校の 1 校である。全て小規模校で、各学級の生徒数が 15 名以下となり、皆小さいころから学校生活を一緒に過ごしている。小学校では複式学級の場合もある。各学校とも 1 年を通して色々な行事に力を入れており、運動会やもちつき大会など、地域の人たちとの交流が盛んである。

また、厚田は山岳や清流、海岸景勝地や丘陵地が連なり、素晴らしい景観が広がっている。日本海に沿った町であるため、観光案内所である「あいロード夕日の丘」にたたずむと、大きく石狩湾が広がった日本海を望むことができる。平成 18 年には、愛を誓い合い、プロポーズするのにふさわしい観光スポット 100 ヲ所を選定する「恋人の聖地」プロジェクトで、厚田公園展望台が選出された。地域性を活かしたイベントも盛んで、厚田神社例大祭、ふるさとあきあじ祭り、望来神社祭などの様々な祭りが行われる。厚田神社例大祭の日の朝には、豪華な大漁旗をはためかせた漁船が厚田沖を進んで豊漁祈願する「海上渡御」が行われ、望来神社祭では、全長 5 メートルの獅子の周りを刀や鎖、長刀などを持った獅子取りが舞う華麗な厚田の郷土芸能、望来獅子舞が披露され、厚田の風物詩となっている。（浦川智帆）

## 2. 厚田中学校の状況

### （ア）概要

石狩市立厚田中学校は、戦後制定された学校教育法に基づき設置された新制中学校であり、昭和 22 年 5 月 1 日に厚田村立厚田中学校として創設された。平成 17 年、厚田村と石狩市の合併により石狩市立厚田中学校となる。厚田村内に存在したいくつかの中学校を統合し、平成 19 年からは、石狩市望来以北の厚田区全てを校区としている。開校当初より、地域の中心となる学校と位置づけられ、保護者のもとより地域の方々からもさまざまな面で期待は大きい。生徒数は、開校当時より昭和 30 年代は約 200 名を維持していたが、村内の人口減に伴い徐々に人数を減らし、昭和 55 年には 100 名を切り、平成 10 年以降は 30 名前後を推移している。生徒数は現在（平成 23 年度）、3 年生 9 名、2 年生 6 名、1 年生 12 名の計 27 名であり、各学級単式となっている。教職員数は校長 1・教頭 1・教諭 7・養護教諭 1・栄養教諭 1・事務職員 1・校務補 1 であり、数名の教員は家庭科など、免許外の教科を指導しなければならない状況が続いている。

### （イ）教育課題

本校では教育目標の達成をめざし、毎年度、重点目標を設定している。本校の今年（平成 23 年）度の重点目標は以下のとおりである。

<sup>2</sup> 石狩市ホームページ

<http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/citizen/life/shimin05104.html>（2012 年 2 月 10 日アクセス確認）

表1 平成23年度 厚田中学校重点目標

学校課題	<p>～地域の中で存在感のある学校を目指して～</p> <p>「表情豊かにいきいきと活動する厚田中学校」</p> <p>1. <b>確かな学力</b>～指導計画の工夫と授業の改善・充実、基礎基本の定着・習熟と総合的知性の育成、学習方法の習得と家庭教育の定着、小中連携による教育内容の充実</p> <p>2. <b>豊かな心</b>～一貫した生徒指導、信頼関係の育成、基本的生活習慣の定着、表現力豊かな言語環境、道徳教育の充実、体験活動・ボランティア活動の充実</p> <p>3. <b>保護者・地域との連携</b>～開かれた学校による相互理解と連携、学校評価の活用、地域文化の継承、地域や学校の人材・資源の活用、特色ある教育活動の推進</p> <p>4. <b>学校運営</b>～教職員の使命感、危機管理意識の高揚、研修・研究の充実、経営参加意識の高揚</p>
------	--

確かな学力について、特に本校で課題となっているのが「基礎基本の定着」である。子どもたちは授業に意欲的かつ真剣に取り組む、興味をもって授業を受けているのだが、なかなかテストでは点数をとれない状況である。子どもたちにしっかり「学力」を身につけさせたいと教職員も強く望んでおり、学力向上が市教委の重点でもあるので、学校としても力を入れている。

豊かな心に関しては、本校では殊更に力を入れるまでもないほど、子どもたちが生き生きと生活をしている。ただし、基本的生活習慣や社会的マナーなど、ともすれば緩みがちになる部分については、気をつけて取り組むようにしている。学校評価委員会からはいわゆる勉強ではなく課外学習などで子どもたちに多様な体験をさせてほしいという意見もいただいている。

保護者・地域との連携については、望来獅子舞の継承を総合的な学習の時間で取り上げたり、「厚中へ行こう会」という形で来校を呼びかけたりしている。保護者・地域はたいへん学校に協力的である。学校評価は教職員に対しては年4回、保護者と生徒は年2回評価を行い、短いスパンで学校改善に努めるようにしている。また、学校運営については、一人ひとりの教職員の自覚により順調に進んでいる。

以上のことから、現段階での本校の課題は一にも二にも学力向上・基礎基本の定着にあり、先生方の日常的な授業の改善・工夫をいかに数値的に成果を示すことができるのか、日々悩んでいる状況である。

#### (ウ) SAT を必要とする背景

本校校内研究の際、当時研究部長の杉原将貴教諭から「小規模校の特徴」という文書が提示された。これは、学校生活の各分野で、小規模校のメリットとデメリットが記されている。以下、主に学習面を中心に列記する。

表2 小規模校でのメリットとデメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ クラス全員に目が行き届く</li> <li>・ 教材教具が活用しやすい</li> <li>・ 柔軟な形態での学習が可能</li> <li>・ 個に応じた配慮や指導がしやすい</li> <li>・ 担任と生徒が互いに深く結ばれており安定した教室の雰囲気の中で学べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教員数が少なく、習熟度別指導ができてにくい</li> <li>・ 切磋琢磨する機会が少ない</li> <li>・ 話し合い活動の場が作りにくい</li> <li>・ 競争意識が乏しくなりやすい</li> <li>・ 個の評価が固定されやすい</li> <li>・ 多様な考えが限定され知的刺激が少ない</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 顔なじみでよく知っている仲間なので、他人に対しての表現力が育ちにくい</li> <li>・ 固まった人間関係の中で生活しているので、外との交流は希薄</li> <li>・ 経験を通して自分を振り返り、より高い目標に向かって取り組もうとする機会が得られない</li> </ul>
--	---

杉原教諭は、上記から、「一般論として、小規模校の生徒はやるべき（与えられた）課題を責任をもってやる意欲や集中力はあり、教師からの助言や援助を素直に聞き入れるが、自分の考えや学習の仕方を振り返り、学習を発展させ、さらに学ぼうとする意欲に欠ける傾向があり、学習が主体的になりにくい」とし、「授業が教師主導に偏りがちになり、個の能力に応じた指導はしたものの、生徒に学習の必要性を持たせたり、個性を生かした指導ができなかったのではないかと、結論づけている<sup>3</sup>。

一方で、「学力」については、中学校は小学校からの積み重ねが大きく影響する。当たり前といえば当たり前だが、入学段階で全員が小学校の全課程を完全に習得している、ということは現実にはあり得ない。これは小学校を批判するものではなく、筆者自身、小学校教員を長年続けていた者として切実な課題である。現在小学校とは、連携協議会を通して、関係性を構築しようとしている。そのため、大規模校からみれば本校は日常から一人ひとりにあわせた指導ができる体制はとれているとはいえ、教科担任だけでは個に応じた十分な指導をするためには一人でも多くの手を必要としている状況にある。

また、上記デメリットを解消するためには、自分たちのコミュニティでない人が入ってくることによる効果が大きく、少しでも多くの人の中で、自分を表現したり、相手を理解する機会を必要としている。その点で、年齢が近く話しやすい環境をつくれる藤女子大学の学生の存在は重要である。上記のことから、本校が SAT を必要とする理由は、①個に応じた指導の充実のため、②外部からの人と触れ合う機会づくりのため、と整理することができよう。（山村健史）

### 3. 厚田中学校での SAT

#### （ア）取り組みの概要

この一年の厚田 SAT の活動は表 3 のとおりである。ただ、それらの活動以前に、そもそも藤女子大学と厚田中学校の繋がり、大学公開講座委員会が望来獅子舞に関する講座を平成 22 年 10 月に大学祭で開催したことに始まる。その時、本稿の執筆者でもある厚田中学校の山村健史教頭がパネリストの一人として参加し、「総合的な学習の時間」での望来獅子舞に関する中学校の取り組みを発表された。

その後、翌年の 1 月から厚田と藤女子大学との交流をより深めるための模索が始まった。その「思い」を初めて形にしたのが、3 月に 1 泊 2 日で実施した厚田フィールドワーク(FW)であった。これには、本学の三宅理一教授、伊井、大学院生を含むゼミ生、計 6 名が参加した。そこでは、厚田中学校での打ち合わせ、石狩市役所厚田支所でのインタビュー調査、町内の寺社を中心とした散策が行われた。また、宿泊先の戸田旅館は築 100 年以上であり、その建物自体が建築史を専門とされる三宅教授には関心のあつたテーマであった<sup>4</sup>。大学では、3 月 27 日のオープンキャンパス（高校生対象）に向けて、厚田での FW のパネルを学部生、大学院生が作成した。その後、阿部学部長とともに学科教員が石狩市教育委員会を

<sup>3</sup> 杉原将貴「小規模校の特徴」（厚田中学校 校内研修資料）、2010 年

<sup>4</sup> 戸田旅館には、8 月、2 月の宿泊でもお世話になった。※2 月は、悪天候のため、当日になり予約をキャンセルせざるを得なくなった。その点でも、戸田旅館には非常にお世話になっている。



訪問し、既の実施してきた SAT の一環として、厚田中学校での学習支援を開始するとの方針がほぼ決定した<sup>5</sup>。

このような準備を経て、4月に入り、本格的に藤女子大学と厚田中学校の連携模索が始まる。その後、藤女子大学花川キャンパス、北 16 条キャンパスで、藤女子大学の窓口である伊井と厚田中学校の山村教頭、数学担当の島貫哲郎教諭、および参加予定の学生との打ち合わせがもたれた。その後、実際の SAT 事業が開始されたが随時、学生を交えつつ、大学教員と中学校教員の間で話し合いがもたれた（表 3）。

表 3 実施初年度(2011 年)の厚田 SAT の動き

年	月	取り組み
2011 年	1 月	12 日：第一回ミーティング 花川（阿部学部長、三宅教授、山村、伊井、大学院生）
	3 月	1～2 日：厚田フィールドワーク（教員 2 名、学部 3 年生 3 名、大学院生 1 名）厚田中学校（岩田校長：当時、山村、三宅教授など）、厚田支所 9 日：厚田 FW の総轄ミーティング 14 日：厚田中学校との連携調整のため、石狩市教育委員会（阿部学部長、三宅教授、伊井、大学院生、吉田学氏） 27 日：藤女子大学春のオープンキャンパスで、厚田 FW のパネル展示
	4 月	15 日：第二回ミーティング 山村+伊井 打合せ 藤女子大学北 16 条校舎 17 日：伊井が facebook で厚田交流プロジェクトのグループを立ち上げる。 19 日：石狩市教育委員会による SAT 説明会：吉田学氏（22 名の参加）
	5 月	10 日：厚田 SAT 説明会 学部 4 年生 3 名 12 日：伊井ゼミ 厚田 FW
	6 月	7 日：第三回ミーティング（山村、伊井、島貫教諭、学生 3 名） 藤女子大学花川校舎
	7 月	<u>7 日：2 年生 3 名 厚田中学校 SAT 一回目</u> <u>11 日：4 年生 3 名 厚田中学校 SAT 二回目</u> 両日とも、選択数学の後、総合的な学習の時間で望来獅子舞の練習を見学+給食 14 日：第四回ミーティング（伊井+山村） 藤女子大学花川校舎 18 日：厚田神社祭（伊井が見学）
	8 月	<u>17～18 日：4 年生 4 名、3 年生 1 名、2 年生 3 名 厚田中学校 SAT 三回目</u> ※ 一日目：午前中：農協にて買い物 午後：部活動との交流（文化部、女子バレー部、野球部） 夜：戸田旅館にて、厚田中学校教員と交流会 ※ 二日目：午前より数学の支援活動
	9 月	20 日：伊井ゼミ（反保）：厚田 FW～厚田中学校 22 日：Air-G カリプラ取材（岩崎、反保、浦川、阿部学部長対応） 藤女子大学花川校舎（学部長室） 27 日：Air-G カリプラ：厚田中学校取材

<sup>5</sup> 石狩市との SAT 事業に関して詳細は、阿部包・伊井義人「石狩市の教育機関と藤女子大学の地域連携—その動向と将来的展望」『人間生活学研究』第 18 号、藤女子大学人間生活学部人間生活学科、2011 年、53～63 頁を参照のこと

	10 月	2 日：厚田中学校文化祭（2 年生 2 名、4 年生 1 名参加） 4 日：Air-G カリブラ放送 6 日：伊井ゼミ（反保）：厚田FW～厚田小学校、厚田支所生涯学習部 14 日：伊井ゼミ（反保）：浜益・聚富FW～浜益中学校、聚富小中学校 <b><u>24 日：4 年生 1 名、2 年生 1 名 厚田中学校 SAT 四回目</u></b> ※ 選択数学＋給食＋生徒会立会演説会を見学
	11 月	7 日：家庭科授業第一回事前研修会 2 年生 3 名＋山村＋伊井 22 日：家庭科授業第二回事前研修会 2 年生 3 名、山村、伊井 ※両日とも藤女子大学花川校舎 <b><u>28 日：4 年生 1 名、3 年生 1 名（以上文学部）、2 年生 3 名</u></b> <b><u>厚田中学校 SAT 五回目</u></b> ※選択数学＋給食＋家庭科授業×3＋放課後学習支援
	12 月	12 月 7 日：教育実習 I B～山村先生による教育実習の心構え 家庭科授業事後研修会 2 年生 3 名＋山村、伊井 藤女子大学花川校舎
2012 年	1 月	20 日：合格祈願餅つき参加を吹雪のため断念 30 日：第五回ミーティング（山村＋伊井） 藤女子大学花川校舎
	2 月	<b><u>20 日：4 年生 2 名、3 年生 1 名、2 年生 2 名（文学部 2 名を含む）</u></b> <b><u>厚田中学校 SAT 六回目</u></b> ※宿泊を断念、日帰り
	3 月	8 日：第六回ミーティング（山村＋伊井） 藤女子大学花川校舎 26 日：石狩市役所厚田支所訪問（山村＋伊井）

方針が大体決まった段階で、三宅・伊井ゼミの四年生有志が、在学生対象に、厚田中学校での SAT 事業に関する説明会を開催した。約 10 名の参加があったが、夏休みのスケジュール調整や厚田への移動手段の関係から、実際に核となり継続的に参加したのは人間生活学科二年生の 3 名であった。

#### （イ） 大学での参加者人数

実際に厚田 SAT に参加した学生は、1 回目 3 名、2 回目 3 名、3 回目 9 名、4 回目 2 名、5 回目 5 名、6 回目 5 名と延べ人数は 27 名に及ぶ。その実数は、10 名である。その中でも、多い学生は 6 回中 5 回参加している学生もいる。

もちろん、今後は一人でも多くの学生に厚田 SAT に参加してもらいたい。しかし、厚田中学校を訪問した中で、公共交通機関（中央バス）を利用したのは、最初の FW と最後の 6 回目だけであり、他は届け出をした上で、大学担当教員の伊井、中学校担当教員の山村教頭の自家用車で移動せざるを得なかった。自家用車の乗車人数には制限があるため、必然的に参加学生の人数も制限される。また、このような移動手段を採用する限りは、大学・中学校側の担当教員が毎回、関与せざるを得ない。石狩市教育委員会や藤女子大学が所有するミニバスの利用も含め、今後議論すべき課題であろう。（以上、伊井義人）

#### （ウ） 中学校での準備状況

前述のとおり、厚田 SAT のきっかけは、公開講座に教頭がパネラーとして参加したことが端緒である。その時にパネラーとして参加するの可否かというところから職員会議の場で全教職員が議論して決定し

てきた（当然、最終判断・決定は学校長である）。

本校は人数が少ないこともあるが、教職員の共通理解を最重視しており、学校にかかわることは些細なことであっても連絡し了承を得ることを大切にしている。基本的にその機会は職員会議となるが、朝の打合せなどでも確認の場を設けている。月一回の定例職員会議で藤女子大 SAT について提案したのは、昨年8月から今年1月まで18回の会議のうち、8回を数える。

最初の段階で先生方から意見があったのは、①短期間数回で終わるようなものはやめてほしい、やらなさちんとやって継続できるものにしてほしいということ、②子どもにとって有益であること、③子どもや先生方に過度な負担を強いるようなことにしないこと、というものであった。そのことを大学側にも伝え、相互で確認を得たうえで具体策を練ることとなった。また、その際、大学側担当教員からは「負担」と「負担感」の違いについても助言いただき、本校の先生方にも伝えたところである。

具体策として、選択教科の数学<sup>6</sup>で、習熟度別授業をしており、本校の実態で完全に個別指導を必要とする子どもがいることから、それを中心に SAT に入っていただくこととした。その後、見通しとしてはあったのだが、SATを進めていく中で、家庭科の TT での外部講師の依頼や、本校の総合学習や行事に参加いただくなどの活動も行おうという話となった。これは打合せの段階で、「本当の学力」や「生きる力（生きて働く力）」を育みながら、「数値で測れる学力」をつける授業のあり方もめざしていければということがあり、単なる学習支援で終わらないようにという双方の確認があったことによるものである。

#### （エ） 選択数学での活動

前述のとおり、選択数学は2年生と3年生の15名が数学の能力によってクラス分けをし、習熟度別に指導を行っている。その教育課程は本校の数学担当である島貫哲郎教諭が編成している。教材は、既習事項のドリルを島貫教諭が自作し、それぞれの能力に応じて進めている。ドリル学習が中心となるが、基礎基本の習得に時間のかかる子どもには授業形式ですすめることもある。

藤女子大学 SAT に支援していただく場合は、来校する約1か月前に教材を本校から藤女子大学に送付し、それをもとに大学では学習会を開きながら支援の準備をさせていただいていた。準備の過程で、子どもたちがつまづきやすい部分などを理解していただき、支援の際も参考になったと考えている。また、実施していく中で、実際の授業場面で島貫教諭がどのような教え方をしていたかを支援する側でおさえておかないと、子どもたちが迷ってしまう恐れがあるということが反省として挙がっていた。また、こちらが教え込むのではなく、子どもたちがどこまでできていて、どこで悩んでいるのかを把握し、自分で解くためのヒントを与えながら導いていくことの大切さも理解していただいた。

今年は SAT が入った選択数学は、授業場面を設定せずドリルを解く際の個別指導が主だったが、今後普通の授業のなかで支援していく方向も探っていく必要があるようだ。というのは、来年から完全実施となる学習指導要領では選択の時間がなくなるため、これまでのような一時間丸ごとドリルに使用できる時間が確保できないからである。

#### （オ） 家庭科授業での活動

藤女子大学人間生活学科の学生は、教職課程で中学校の家庭科の免許を取得でき、そのための学習を深めている。一方、厚田中学校は家庭科を専門とする教諭の配置がなく、北海道教育委員会に免外申請を行って音楽の上村啓華教諭が家庭科の授業をしている。家庭科の専門知識を背景にもち、授業をする

---

<sup>6</sup> これは平成24年度から完全実施となる学習指導要領では削除される。

のが子どもにとってよい。そこでTTの形式をとり、T1は上村教諭が行い、T2として学生を外部講師として授業を行った。

最初に本校家庭科の教育課程を藤女子大学に提示し、TT授業を行いやすい単元を相談した。次に単元決定後、学生が専門的見地に基づいて授業案を作成した。この授業案を学生、大学担当教員、山村で2回ほど事前研究会で検討を重ねるとともに、短時間だが模擬授業も行った。その間、学生と山村は電話やメールなどで何度も教材や授業展開等について打合せを重ねた。

当日は、2年生で食品添加物の授業を2時間続きで、1年生で生鮮食品の授業を1時間、食品表示の授業を1時間、3名の学生が外部講師として生徒に指導した。学生は教材の選択をはじめとし、授業も落ち着いて行い、板書にも気を配ることができていた。その後、事前研を行ったメンバーで事後研究会を行い、生徒の学習を交流したり、授業づくりの反省を行った。

この活動は、①免外指導の学校でも専門的な教材研究に基づいた授業を子どもたちが受けられること、②教員免許を取得して将来教員になろうとする学生に授業をする機会を持たせる、等の理由から有効なものである。業務の都合から事前研、事後研には本校から山村だけの参加となったが、今後は上村教諭や栄養教諭の笹優子教諭も参加する中で、単発の授業だけでなく、家庭科の教育課程全体の作成についても共同で研究できるような見通しももてると感じる<sup>7</sup>。

#### (カ) 夏休み（部活動交流）の活動

藤女子大学SATでは、基本的に選択数学の支援ということで本校はおさえていたが、月に一度のペースでは子どもたちとのかわりも薄く、友好的な雰囲気がなかなかできにくいということもあり、夏休みが終わる前2日間に来厚いただき活動していただいた。

この日は3年生の学習会にあたっており、その支援をしていただいた。併せて、1・2年生が部活動で登校するため、それぞれの部に入っていただき子どもたちと交流を深めた。野球部はマネージャー的な活動、女子バレー部は子どもとともにプレーしていただいた。文化部は調理をともに行った。調理に関しては学生のみなさんが材料の調達や子どもたちに分かりやすく伝えるためのレシピの作成など、最初から最後まで学生が主体となって子どもたちと活動した。

#### (キ) 学校行事への参加

本校では地域に伝承される伝統芸能を継承するため、総合的な学習の時間に「望来獅子舞」を行っている。年度当初に望来獅子舞保存会の方に来校いただき、練習を始める。最終的な発表の機会は文化祭である。藤女子大学の学生が来校する機会に獅子舞の学習を設定し、パートごとや全体の練習段階から見ていただくことにした。また、全校生徒の前で感想も述べていただいた。文化祭当日は獅子舞のほか、生活体験文の発表や、職場体験の発表など、子どもたちの授業以外の場面をみていただいた。伊井准教授には子どものほとんどが参加する厚田神社祭に来ていただき、子どもたちが地域で活動する様子も見ていただいた。また、生徒会の立会演説会や、天候の関係で参加が実現できなかった合格祈願餅つき大会など、子どもたちと触れ合い、その距



写真 1 望来獅子舞の練習風景

<sup>7</sup> 2月の厚田中学校訪問の際、上村教諭と藤女子大学の学生が反省会を持つことができた。

離を縮める機会を設定してきた。

これらのことは、ともすれば「SAT＝学習支援」という構図が本校の場合には当てはまらないことの実例である。本校の関係者（子どもはもちろん、保護者・地域・教職員も）が望んでいることは、他の地域から人が来て子どもたちの世界や、子どもたちが他の地域に自分たちの活動を広げていくことであり、藤女子大学 SAT にもその役割の一端を担っていただきたいと考えている。そのため、学生のみならずからすれば、「ただ参加しているだけで支援していないのでは」と思われることがあったとしても、そうではないのだということを理解していただきたい。自分たちも楽しんで見てくれたり参加してあげることが SAT として重要なことであるという考えでいてくれることが大切だと思う。（以上、山村健史）

#### 4. SAT への評価・検証

##### （ア）中学生・保護者・教員による評価（アンケート）

厚田 SAT は、前述のとおり本校教職員の合意を得たうえで大学と協議し事業をすすめてきた。それに対し、教職員が実際動き出して、その後、どう感じているのか、保護者の受け止め方はどうなのか、さらに学習の主体者である子どもたちがどう感じているのかを把握するためアンケートを実施した。その結果の概要を考察する。この結果を来年の SAT 事業に生かしていくようにする必要がある。

##### \*保護者へのアンケート結果

家庭数 23 に対し、アンケートの回収率は 70%であった。厚田 SAT の存在については回答した 69%の保護者が認識しており、子どもとの会話から SAT について知ったという家庭が大多数であった。このことから、家庭での会話に SAT のことが話題になっていることがわかる。また、大多数の方が、SAT を今後も続けてほしいと願っており、その理由として、授業への理解の手助け、人との出会い、子どもたちのよい反応を挙げている。SAT に期待することとして、数学以外の教科、部活動への参加を挙げている。保護者による SAT への期待は明らかで、今後も様々な関わりを持ってほしいと感じている。

##### \*1年生へのアンケート結果

アンケートの回収率は 100%。1年生は数学・獅子舞・家庭科外部授業・部活動でかわりがあった。交流した感想では、楽しかった、勉強をわかりやすく教えてくれたというものがほとんどで、好感触である。そのためほとんどの子がまた来てほしいと望んでいる。

##### \*2年生へのアンケート結果

アンケートの回収率は 100%。2年生は選択数学・獅子舞・家庭科外部授業・部活動でかわりがあった。交流した感想では、わかりやすく勉強を教えてくれたというものがほとんどだった。また来てほしいと感じている子がほとんどで、その理由として、もっと交流したい、厚田のよいところを知ってほしいというものであった。SAT に望むこととして料理を挙げている子がいた。

##### \*3年生へのアンケート結果

回収率は 67%。担任の方針で自主性を重視しているため、提出しないものに対して強要はしなかったようだ。3年生は選択数学・獅子舞・部活動・放課後自主学習でかわりがあった。交流した感想として、優しく丁寧に教えてくれたというのがほとんどである。回答者全員がまた来てほしいと望んでいる。



＊教職員（校長・教頭・事務・校務補を除く）のアンケート結果

回収率は 100%。まず構想当初より懸案であった負担「増」と負担「感」であるが、どちらもなかったようだ。今年は特に数学の島貫教諭、家庭科担当の上村教諭の労力が多かったはずだが、両名とも負担には感じていない。SAT の感想として、学生のやる気を感じられた、子どもたちが喜んでいて、こちらもしろんなことを学べたなど好感触であった。今後 SAT 続けていくことにもおおむね賛同している。その理由は子どもたちが多くの人とかかわりを持てることを挙げている。他方、教員仲間への負担を感じている者もいる。SAT に期待することとして、行事への参加、他教科の外部指導などを挙げている。

以上の結果から、保護者・生徒・教職員はいずれも SAT に対し、好感をもっていることは確かである。これまで述べてきたことと通じるが、学習を支援してほしいということ以上に、外部からの若い力、子どもたちと親近感のある年齢の人が厚田にきてくれる、ことに価値を見出している。このような機会が SAT によって得られたことへの評価とともに、そのような評価が出た背景には、参加学生が積極的かつ真摯にやる気を持って取り組んでくれたことが大きい。地域柄もあると思うが、厚田（厚田・望来・発足）の人は大人も子どもも、地域や自分たちのために一生懸命でいてくれることに対して、とても素直にありがたいと感じてくれる方々であり、そういう姿勢に対しては全力で支え協力して下さる方々である。学生の姿勢が伝わったものと感じる。

一方で教職員のなかには、よいこととは感じつつも今後どう展開していくのかによっては不安を抱えている部分もある。負担の問題をはじめ、学校とのかかわり方など今年の活動では見えない部分もある。そのような不安を率直に出し合って以降の活動を企画していく必要があると感じる。（以上、山村健史）

（イ） 藤女子大学学生による評価（感想）

・ 選択数学

藤女子大学による学習支援の一環として、厚田中学校の選択数学の授業に学生がアシスタントティーチャーとして参加するものであり、数学の学力低下が懸念されていることから始まったのが厚田 SAT である。基本的には、中学校の数学科の島貫教諭が提示する教材を、中学生が解き進め、つまづいた際に学生が助言をするといった流れである。生徒が自ら学び考えることを目標としているため、答えを教えるのではなくその解き方のヒントを提示し、解に結び付ける役割を学生は担ってきた。少人数数学級で



写真 2 選択数学での学習支援

はあるが、学力差は存在する。それらを埋めていくのも選択数学における学習支援の目的の一つである。

選択数学の学習支援は、学年を問わず行われてきており、全学年を合わせるとこれまで 5 回実施されている。形態は様々で、学生が机間指導を行う場合や、生徒と一対一で指導をする場合などがあつた。マンツーマンでの指導は、習得に時間のかかる生徒にとっても指導を行う学生にとっても良い。回を重ねるごとに、生徒から「ここが分からない」と声がかかるようになり、スムーズな指導が可能になった。学生は選択数学に参加する際、生徒によりわかりやすく説明をするために、事前にその教材を研究し、島貫教諭との打ち合わせを重ねている。しかし課題は多く、今後見直すべき点がいくつかある。第一の課題として、生徒への助言の仕方である。学生は、それぞれの生徒に合った類題の提示や、どこでつまづいているのかを把握し的確に指摘を行う

必要があるが、丁寧に説明しすぎて答えの導き方を全て教えがちになってしまっている。一から十までの説明をするのは簡単だが、生徒が自分で閃くための「一つのきっかけ」を与えることが肝心なのである。第二の課題として、入試対策への結びつけ方である。現在、生徒全員が同じ内容の教材を使用しているが、それぞれの学力に合わせた教材を使用することも考慮すべきであろう。一対一という形態をうまく利用することで、より入試を意識した学習支援が実現できるのではないだろうか。

厚田中学校での SAT の活動は立地的条件から頻繁に行うことは難しいが、今後も継続的に学習支援することで、生徒の学力向上に貢献したい。そして前述した課題を見直し、より実りの多い活動になるよう模索していきたいと考えている。(西川絵梨)

#### ・ 家庭科

厚田 SAT の取り組みの一つとして、学生による家庭科支援を行った。厚田中学校には家庭科教諭を配することが出来ないという現状があり、授業は音楽教員である上村教諭が兼任で行っている。①家庭科教諭を志している学生が中学校に指導案、教材を提供すること、②教職課程において、実践的な授業が少ない学生を対象に、授業経験の場を提供することを目的とし、11月28日、人間生活学科の学生により家庭科支援が実施されることになった。実施された学級は、1年生2時間、2年生2時間の計2クラス4時間で、担当した学生は2年目に在籍する3名の学生であった。



写真3 家庭科でのTT風景

授業内容は食分野の中の「生鮮食品と加工食品の違い・保存方法」、「食品成分表」、「食品添加物」の三つであり、前者二つが1年生、最後の分野が2年生で行われた。学生3名はおよそ1ヶ月半の準備期間の中で伊井准教授、厚田中学校の山村教頭によって指導を受けながら、指導案、教材作成に全力を尽くし、当日に備えた。

当日、授業内容をDVDに記録し、厚田中学校教諭数名、大学担当教員、学生数名で、授業の様子を見守った。当日の授業を終え、数日経過した後、指導教員2名と授業を担当した学生3名で反省会を行い、学生の授業に関する課題点や成果を振り返り、一連の家庭科支援の取り組みが終了した。

以上の取り組みを踏まえ、成果として、学生が家庭科の授業における“やりがい”と“難しさ”を実感すると同時に、“達成感”を味わうことができ、私たち学生の“向上心”を駆り立てる切っ掛けであったといえる。そのため、今後の学生による教職への取り組みに強く動機付けを与える実践であった。課題点としては、今回の取り組みの中で厚田中学校側とは山村教頭としか十分な連携を取っていなかったことがあげられる。普段の授業を担当している教員の方々と連携を取っていれば、より良い授業展開、そして反省会を実現できたはずだ。そこで、来年度からはより多くの厚田中学校の教諭と交流を持ち、学生と現場の教諭の連携を図り、より充実した家庭科支援に取り組んでいきたい。(岩崎遥)

#### ・ 夏の学習支援+子ども達とのふれあい

藤女子大学の学生が厚田中学校の野球部・バレー部・文化部のそれぞれに参加し、部活動交流を行った。なお、部活動は生徒数の関係上、この三つのみである。男子生徒全員が所属する野球部では、学生は声掛けやボール拾いなどを行い、普段の練習に参加した。バレー部では、部員が少なく日常的に試合をすることが困難であるため、バレー経験者である学生が参加し試合形式での練習を行った。部員たち

は普段から向上心をもって一生懸命に練習を行っているため、石狩管内でも2位と高成績を残している。実際に試合を行った学生も生徒の技術の高さを実感できた。文化部では調理実習を行った。普段、文化部が校庭の一角を利用して行っている菜園で採れた果物「スイカ」を利用し、フルーツパンチ等を作った。文化部の生徒は、実際に自分たちで育てたものを収穫し、食すことの楽しさやその大切さを学ぶこ



写真 4 文化部との交流風景

とが出来た。このように、交流を通じて生徒と少しずつ打ち解けることが出来たが、厚田中学校への訪問自体が不定期であること、また、部活動交流は一度きりであるため生徒との間にまだ少し距離を感じている。今後さらに交流の頻度を増やす必要があるだろう。また、工夫によってはさらに部活動交流を有効に利用できるのではないだろうか。例えば文化部での交流において、大きな発展性を感じている。厚田 SAT に加わる学生の多くが、家庭科教員の志望者である。このことから、今回のような調理実習はもちろん被服構成等を通じ

裁縫をしたり、環境を考える視点から厚田を探索するのもいいだろう。これらの活動を通じ生徒との距離を縮め、生徒と学生が互いに力を発揮できる交流となることを期待する。

さらに、厚田 SAT の夏の交流として、厚田中学校の先生方と藤女子大学の教員とその学生で懇親会を行った。そこでは中学校のことはもちろん大学のこと、今後の厚田 SAT についてなど様々な意見交換が行われた。厚田 SAT を長期的に続けていくためには、互いの理解と協力が必要である。通常の SAT は数学の授業に参加し学習支援のみを行うが、厚田 SAT はさまざまな交流パターンを持つ。生徒や学生が多く の 場 面 で ふ れ あ い 活 動 す る 機 会 を 、 今 後 は さ ら に 私 た ち が 有 意 義 な も の に し て い き た い 。 ( 西 川 絵 梨 )

#### ・ 放課後の学習支援

厚田中学校では、普段から放課後学習を実施している。部活を引退した3年生を中心に行われており、その自主性をサポートするべく担任と副担任の先生が出来る限りついている。時折、部活動の顧問や管理職の先生も顔を出し、厚田中学校全体でこの放課後学習を支えている。今回私たちはその役割につき、放課後の学習支援を行った。生徒たちが学習している様子を窺いながら、ヒントを出したり解き方を一緒に考えたりと、私たちはあくまでもつまづきを発見し、生徒自らが次のステップに進むための手助けをする役割にあたった。

放課後学習では、生徒たちは学習する教科、教材を自由に選択する。教材は、生徒が持参した問題集や授業で使用したプリント、そして学習するべきことがわからない生徒のために教室には各教科の基礎問題から応用問題までをコピーしたプリントを用意してある。初めは本人の理解度と問題のレベルがずれている生徒もいたようだが、回数を重ねるうちに自分の状況や受験校の過去問の傾向から、問題を選択できる生徒が増えてきているようだ。

このように放課後学習の活動の範囲の可能性は通常授業よりもはるかに広がるため、生徒一人ひとりをより自然な状態で見ることができる。それにより、放課後学習の補助の中で生徒一人ひとりの学習への意識の程度やつまづいている箇所を把握することが可能となり、より良い教科指導のための目安となる。実際に、初めて放課後の学習支援に携わった



写真 5 放課後学習支援

私にさえも生徒がどのようなところに苦手意識をもっているのか読み取ることが出来た。学生の私たちが放課後の学習支援をする意義とは、まさにその「放課後」の生徒たちと触れ合うところにある。選択数学の時間でも学習支援に取り組んでいるのだが、あくまでもそれは授業の時間である。実際の現場で教科指導をしていく上で、「放課後」という時間を有意義に利用することの重要性を実感すると同時に、放課後学習の支援はもちろん、SATへ参加することへの責任感を良い緊張感と共に再認識することができる。

今後は、私たち学生と担任の先生、教科指導の先生とのより細やかな連携が課題となる。一貫した指導、かつ生徒一人ひとりの実態に合わせた学習支援を行うためには、普段の授業での教え方との統一を図ること、そして生徒一人ひとりの課題を明確にする必要があるからだ。私たちはその連携を軸に、自分なりのスタンスをしっかりと確立し、ぶれない状態で放課後の学習支援に臨む必要がある。(平鍋舞)

#### ・ 学校行事

厚田中学校の学校行事に、厚田 SAT 参加者は何度か訪問している。平成 23 年度で参加した行事は、「獅子舞練習披露会」、「厚田神社祭」、「厚田中学校文化さん」、「生徒会演説」の四つである。他にも「JICA 交流」、「餅つき大会」等参加予定をしていたが、JICA 側の結核発生による行事の中止や、石狩方面の悪天候による断念等により不参加となった。

7 月 7 日、11 日に行われた獅子舞練習披露会は、総合的な学習の時間の一環として行われており、学校の体育館にて地域の方々に披露するものである。その練習披露会に学生が見学した。ちなみに、この訪問が厚田 SAT 初の取り組みの日であった。7 日は伊井准教授と学生 3 名、11 日も同様で 2 度訪問を行い、生徒たちと交流をしながら初めて厚田の文化に触れる機会となった。また、同月の 18 日には厚田神社祭が行われ、学生は参加できなかったが、大学担当教員が訪問し、厚田中学校の生徒や教諭だけではなく、地域の様子を見学することができた。

10 月 2 日に行われた厚田中学校文化祭（テーマ：Hey!和）には、学生 3 名が訪問した。想像以上に地域一体となって行われている学校祭が繰り広げられており、私たちは心から楽しむことができた。また、同月の 24 日には生徒会演説が行われ、そこにも学生 2 名で見学をした。人数が少ない中で、姉弟が推薦する等、へき地ならではの演説会での生徒たちの様子を垣間見た。

以上が平成 23 年度に参加した行事内容である。これらの参加状況を踏まえ、成果として、厚田（中学校）の文化を直接、見聞することができ、学生たちは「へき地」についてより理解を深めることができた。参加している学生の多くは都市部の出身であり、「へき地」に関して実態を知る者は少なかった。だが、勉学の様子だけではなく、生徒たちの日常の一つである“地域の行事”に参加することで、学校と地域との関わり方が濃いという、生徒たちを取り巻く環境を知ることができた。今年度は、行事参加を「見学」という形でしか、成しえていなかったが、へき地における学校と地域との関係をより知るため、生徒や地域の方々とより交流を深めるためにも、来年度は、準備段階から地域の輪に加わり、厚田を盛り上げる一員になれるよう勤めていきたい。(岩崎遥)

#### ・ 卒業論文から見てきたもの

私（反保）は、卒業論文で、へき地の学力について焦点をあて研究を進めた。そして、へき地学校＝人数の少なさに問題があるのではないかという結論に至った。人数はまず、学力に関係してくるといえる。教育には、ある程度の人数が必要である。現在、少人数であればあるほど、学力は高くなると一般的には、思われがちである。だが、へき地学校は、人数が少なすぎる。卒業研究を進めるにあたり、石



狩管内のへき地学校の協力を得てインタビュー調査も行ったが、各学校で共通して言っていたことが「コミュニティの小ささ」ということであった。生徒たちは、小さい時から同じメンバーで構成されているため、新たな刺激というのは、少ない。例えば、国語の言語活動でも人数が少ないため、言語活動の時に話し合いが深まらない。人数が少ないため、切磋琢磨するような環境ではなく、競争心や向上心の低さに繋がる。競争心だけが、学力の向上に繋がるとは、思わない。しかし、高校受験や、テストで点数を取るということを考えると、競争心ということは重要であり、その競争心が欠けているために、学力が上がらないという現状があるのかもしれない。

では、へき地教育の充実を図るには何が必要なのか。私は、多くの人との交流や出会いが生徒を育てる上で必要であると考え。そのためには、刺激と連携がもっと必要がある。刺激を与えるには、まず、人同士の連携が必要である。それは、SAT を通じて行われている大学生との連携、生徒にどのような指導を行っていくかということを話し合う教員同士の連携、文化祭や運動会などの学校行事に活気をだすためには、なくてはならない地域の方々との連携というのが、都市部以上に必要になってくる。次に ICT の力を借りることである。ICT の力を借りることで、例えば、私たちが、もっと学習支援をしてあげたかったのに、へき地であるために、なかなか学校に足を運べず、十分に行うことが出来なかった SAT も、中学校と大学との間に、学習支援出来るようなシステムネットワークを構築することで、中学生がわからないことがあれば、大学生にモニターを通じてすぐ聞くことができる。また、北海道、日本、世界ともっと視野を広げて、同年代の子どもたちと交流することが可能になる。ICT の力を借りることで、周囲との連携も図れ、人数という壁を越えられる一つの手段でもある。いくつもの輪が重なっていくことで、へき地学校に刺激を与えられるであろう。(反保遥)

#### ・ 教育実習と SAT の違いについて

教育実習の定義は、「学校教育の実際を学び、授業などの実地練習を行う」ことである<sup>8</sup>。英語でも“Teaching Practice”と記すように、学生(実習生)が実際の学校現場で授業などを体験し、訓練することがねらいである。よって実習生に対して「指導教諭」が存在し、実習生は指導を受けながら実習を行う。一方 SAT とは、“School Assistant Teacher”の略称である。すなわち、私たちが厚田で行っているように、学生が地域の中学校などに行き、学習支援をすることが目的である。教育実習とは違い、その学校の現職教員あるいは学校の力になり、生徒の学習を支援するために行うのである。

このようにねらいが異なれば実際に行う内容の違いもある。教育実習の場合、実習生は特定のクラスに配属され、実習生自身の専門の教科の一斉指導の授業をメインで行う。それに対し厚田の SAT では、英語や家庭科を専門とする学生も中学 1 年生から 3 年生までの数学の学習支援を行う。さらにその学習支援は学生による一斉指導ではなく、練習問題を解く生徒に机間指導で、生徒のわからない点を個別に教える形態である。その他に、家庭科を専門としている学生が、生徒がより興味関心を引くように工夫を凝らした家庭科の授業を厚田中学校で行ったこともある。

しかし、教育実習と SAT は似ている部分もある。例えば、学生が学習支援に参加することで、現職の先生方の生徒との触れあい方や個別指導の仕方を間近で見て学ぶ。また学習支援の合間に学生の専門科目の授業を見学させて頂けることもある。このように SAT を行う中でも学生が学校現場で色々な経験をし、将来教職に着いた時のための練習にもなる点では、教育実習と似ている。さらに「へき地」と言われるところにある学校の様子を知り、そこで学習支援として現場を体験することは教育実習だけでは得

<sup>8</sup> 新村出編『広辞苑』(第六版)、岩波書店、2006 年より引用



られない貴重な機会である。SAT と教育実習はもちろん違いはあるが、どちらも学生にとって、「生徒の学習を指導する」「実際の学校現場で学ぶ」場であることが言えるだろう。(鈴木遥)

#### (ウ) 大学教員による評価

今回の厚田 SAT は、通常の SAT と異なり、一年間で学生の成長を間近に見ることができた。これは、教職担当の大学教員の筆者にとって率直に、嬉しい経験であった。来年度の実施に向け、様々な課題を乗り越え、より良い厚田 SAT を実施していく必要がある。しかし、まず、この経験が前提にあることを最初に述べておく。

大学では、伊井が厚田中学校との SAT の調整役である。石狩市教育委員会との SAT 事業には、阿部包人間生活学部長に調整役をしていただいていた<sup>9</sup>。通常、SAT 事業には、年度初めの説明会や希望学生の取りまとめ以外、殆ど大学教員は関与しない。そのため、学生がどのような活動を各小中学校で行っているかは、あまり見えてこないのが現実である。事前準備なしに、小中学校に出向き、学習支援をしながらの SAT 事業に伴う教育成果を、各学校の教員がどのように判断しているかは興味のあるところである。そのように、いわば客観的に眺めてきた石狩市との SAT であるが、厚田 SAT はその例外である。その理由として、第一に移動手段、第二に中学校側との調整、第三に大学内での調整の課題を乗り越える必要があったからである。以下、その三点に焦点を当てて、今後の課題を提示したい。

まず、移動手段であるが、厚田への公共交通機関はバスに限定されている。所要時間は札幌から約一時間半であり、一日五便運行している。このような状況を勘案していただき、石狩市教育委員会には、SAT 一回に支給される交通費を 1,500 円（通常は 1,000 円）に増額していただいている。ただし、中学校側の授業開始時間を考慮すると、このバスを利用しにくい実情がある。そのため、大学・中学校の担当教員が当該機関に届け出をした上で学生の送迎をしてきた。しかし、この実情は担当者の「労力」に加え、学生と教員の時間調整が困難なため、最善の策とはいえない。長期的な SAT の継続を考慮すると代替策が求められる。石狩市教育委員会や藤女子大学が所有するバスを利用するなどの可能性を模索する必要がある。

次に中学校側との調整である。通常の SAT では、小中学校の担当者と学生が直接連絡を取り合い、定期的に週一回程度、同じ時間帯に学校を訪問している。しかし、厚田中学校との SAT は、約二ヶ月に一回の不定期訪問となる。また、通常の SAT は個人単位の訪問であるが厚田では複数名で動くこととなる。将来的には学生代表者を（場合によっては複数）決定し、その学生が中学校側との連絡調整役になる可能性も模索していきたい。

最後に大学内での調整である。SAT の参加学生は、その多くが人間生活学科に所属する 2～4 年生である。学生間の調整で最も困難なのが、訪問時間の決定である。参加学生は、教員免許や社会福祉士の受験資格に関わる講義を多く履修しており、同じ学年ですら同じ曜日、同じ時間帯に半日の自由時間を確保するのも困難となる。これに文学部の学生を含めると尚更である。そのためにも、学生がまとまって参加するには、「大学の休業時期であり、中学校が休業時期ではない」夏期・冬期・春期休業期間の集中的な訪問の可能性を今後も探していきたい。また、大学教員内での役割分担も今後は課題となる。中学校側が SAT 事業を教頭の職務事項としたように、大学側も教職課程教員の一環としての位置づけを確立せねばなるまい。(伊井義人)

---

<sup>9</sup> 詳しくは、阿部包・伊井義人、前掲論文。

## おわりに：今後の展望

厚田 SAT を継続する上での実務的課題は既に述べてきた。ここでは、より広い視野から厚田 SAT を見つめ、今後の展望を述べたい。志水は「学校現場での学校外の人間の関わり方」を①セラピスト型、②コンサルタント型、③コラボレーター型、④インフォーマント型、⑤ボランティア型に分別している<sup>10</sup>。この分類をもとに、藤女子大学による厚田 SAT の 2012 年度の状況を振り返り、本報告を締めくくる。

今回、藤女子大学の参加学生の立ち位置は、どれか一つの区分に当てはめることはできず、流動的であった。厚田 SAT の開始当初は、⑤ボランティア型で選択数学に関わっていた。これが基本的な役割となる。しかし、卒業論文で「へき地」教育を扱った学生や学校行事を見学した学生は、④インフォーマント型にも関与していた。つまり、厚田中学校に勤務している教員にインタビューをすることにより、自らのボランティア型参加を見つめ直してきたことになる。さらには、家庭科授業は、ともに授業を構築するという意味で、③コラボレーター型として一步進んだ関与方法であったといえる。つまり、段階や立場によって流動的な関わり方を学生たちはしていた。通常の SAT は、ボランティア型に限定されている。そのため、参加学生は、実に多様な関係性を厚田中学校とは構築してきたといえる。これは、勿論、教職課程を履修する学生にとっては、大学での授業で得た知識を深めるために、有益な経験であったであろう。

一方、大学教員はどの段階であったのか。非常に中途半場であったと筆者は反省せざるを得ない。SAT を中学校側と一緒に作り上げていくという意味では、③のコラボレーター型であったのかもしれない。当然ながら、中学校教員と大学教員の専門領域は異なる。互いの知識や技能を組み合わせつつ、中学校・大学の教育活動の一環としても、今後厚田 SAT を継続していきたい。また、学生を受け入れる中学校側にとっても、なにがしかの経験を SAT から見出してたとき、より対等な関係性を築けたといえるであろう。そのような関係性を築けるよう、来年度以降も厚田 SAT を実践していきたい。(伊井義人)

---

<sup>10</sup> 志水宏吉「研究 vs 実践—学校の臨床社会学に向けて」『東京大学大学院教育学部研究科紀要』第 41 巻、2002 年、376 頁。